

トートロジーとかけがえのなさ

佐藤らな

ranasato877@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

キーワード：トートロジー 無意味 カテゴリー化 かけがえのなさ

要旨

酒井 (2012) はトートロジーを、把握された類似性を根拠に対象を命名する自由に基づき、同じ語で「二度命名する」行為であると規定している。この見解では、言語記号の意味は、その記号が使われるたびに更新されていくのであって、固定された「本来の意味」は存在しない。本稿では、このような意味の絶え間ない更新を可能にするものは対象やカテゴリーへの強い関心だと考え、それを「かけがえのなさ」と呼び、トートロジーは、「かけがえのなさ」を見出すことの自由を表明する表現であることを明らかにする。私たちは、「かけがえのなさ」に導かれ、類似性を認識し二度の命名を行う。私たちは、他者が対象やカテゴリーに対して持つ「かけがえのなさ」をかなりの程度把握している。そのことによって、「二度命名する」行為を許し合う言語共同体が実現しているのである。

1. はじめに

「猫は猫だ」や「イチローはイチローだ」のように「XはXだ」でXに同じ語を繰り返して用いる文はトートロジーと呼ばれる。酒井 (2015) は「トートロジー」研究について以下のよう

- (1) たとえば「 p であるか p でないかだ」「 p ならば p だ」「 $x=x$ 」といった文は p や x に何を代入しようとも常に真になるので、恒真文と呼ばれる。恒真文は自明のことを述べているだけであり、そこから新たに学べることはない。それゆえ、無意味であるとされる。[中略] 恒真文が無意味であるにもかかわらず、日常言語では恒真文に似た形式の文が用いられることがある。たとえば「勝つか負けるか2つに1つ」(「 p であるか p ないかだ」に類似)、「信長だってやるときはやるよ」(「 p ならば p だ」に類似)、「やっぱり織田信長は織田信長だ」(「 $x=x$ 」に類似)などは特に無意味な文とは感じられない。そこで「無意味であるはずの文が実際の言語使用において意味を持つのはなぜか」が問われる。この問いを探究するのが言語学におけるトートロジー研究である。(酒井 2015: 168)

本稿は、上記と同様の問いを念頭に置くものである。具体的には、酒井 (2012) の議論を踏まえ、実在性と「かけがえのなさ」という観点から、トートロジーを用いる動機について説明を与える。

次の第2節では、酒井（2012）の分析を紹介する。第3節では酒井と類似する主張を行なっていると思われる佐藤信夫（1986a, 1986b）が酒井の主張とどのように関わっているかを見る。第4節ではプロトタイプと「典型的な物語」がどのような存在であるのかを概説し、第5節で、酒井のいう命名権の動機付けについて、「かけがえのなさ」という概念を導入する。第6節は、そこまでの議論を踏まえて酒井の分析する「不毛なトートロジー」が不毛であることの説明を修正する。第7節はまとめである。

2. 酒井（2012）の分析における再命名について

酒井（2012）は言語学の枠組みで書かれた先行研究の議論をことごとく退け、独自の説明によってトートロジーの意味を構築することを試みている。それぞれの理論に対する酒井の批判をここで詳しくとりあげることはしないが、酒井は、先行研究の批判を通して得た次の三つを「事実」として提示する。

- (2) (i) トートロジー「XはXだ」が発話される時点で、Xの意味は未定である。
- (ii) トートロジー自体はいかなる命題も表していない。
- (iii) 「XはXだ」において、語Xが適用されたものに再び語Xが適用されている。

（酒井 2012: 233）

例えば、以下の例について考えてみる。(3)はトートロジー、(4)は「XはXではない」の形で同じ語を繰り返して否定する矛盾文である。この二つは対立している。しかしながら、「猫の意味C」を仮定してしまうとこの対立は生じないことになってしまう。

- (3) ねずみを捕らなくても猫は猫だ。
- (4) ねずみを捕らない猫は猫ではない。

「一般に、ある語Xの意味Pを満たす要素に属性Q（ただし、QはPに含まれる属性と矛盾しない属性）をつけくわえたものもPを満たす。例えば、猫が動物なら、大きな猫も動物である（酒井 2012: 206）」。

これと同様に、猫が動物であれば、ねずみを捕らない猫も動物である。猫の意味Cに「ねずみを取らない」という属性を付け加えても、Cを満たさなくなるということはないはずであるが、(4)はそのありえない事態を記述してしまっていることになる。猫の意味Cを考える限り、(4)はいかなる事態も記述することができず、トートロジーである(3)との対立もありえなくなる。しかしながら、実際(3)(4)は対立しているため、意味Cを仮定することが誤りだと言わざるをえない。(3)と(4)の対立は猫の意味が未定であるときにはじめて生じるのである。また、仮に、「XはXではない」における第一のXと第二のXの語義が単に異なると考えることもできない（酒井 2012: 注(76)）。第一のX（ここでは猫）が、Qという意味を持ち、かつ第二のXがRという意味を持ち、かつQとRに重なりがないとすると、

「XはXではない」という文は「10未満の数は100以上の数ではない」のような自明の理を述べたことになるが、現実問題として、(4)が自明の理を述べているとは感じられない (ibid.)。これらのことから、酒井は (2) (i) (ii) の事実を証明する。そして「XはXだ」のXの意味が未定、つまり「定まっていない」ということは、トートロジー「XはXだ」はいかなる命題も表していないのである (酒井 2012: 207)。そして、(2) (iii) はいかなる理論的立場に立ったとしても否定し得ない (酒井 2012: 232)。

酒井は (2) に挙げた三つの事実から、これまでの先行研究でとられたいかなる立場にも属さない視点から、新たな主張を試みる。酒井 (2012: 233) は「トートロジー「XはXだ」の発話とは、Xと呼ばれてきたものに再びXという名前を与えることによって、Xの意味を定める行為である」と言い、「トートロジーとは、あるものに対して、Xによる再命名を行う文である」と述べる。例えば、有名な野球選手であるイチローがまったくヒットを打たなくなってしまうとき、以下を発話するのは自然である。

(5) こんなに打たないイチローはイチローではない。 (酒井 2012: 255)

(6) どんなに打たなくてもイチローはイチローだ。 (酒井 2012: 255)

これらの発話は、「イチロー」という語の意味を共有した上で、何らかの事実関係について対立しているのではなく、「イチロー」の語の意味について異なる提案をしているのである (酒井 2012: 255)。酒井は、矛盾文 (5) の二番目の『イチロー』という語は、それが名指す対象がヒットを打つ時点においてのみ適用されるような意味を持つ」とし、トートロジー (6) の二番目の『イチロー』と言う語は、それが名指す対象がヒットを打つかどうかとは無関係に適用されるような意味を持つ」と主張する (ibid.)。もちろん、ヒットを打たないイチローが、かつてイチローと名付けられていたのと同じ存在であることは誰もが同意し、同一性に関する理解は共有されている。しかし、同一性の理解の共有は、類似性の理解を共有していることを保証しない。これは、オタマジャクシがカエルに成長した時に、それらは同一物であるが、似ていないことから二つの名前が用意されていることからわかる。同じ名前では呼べば、類似性を見てとったということであり、異なる名前では呼べば、差異を見てとったということとなる。類似性を見てとるべきなのか、差異を見てとるべきなのかについて言語規約は完全に決定できない。言語の使用のみがそれを決定するのであり、「こうした意味の不確定性の元に成立するのがトートロジーという現象にはほかならない」と酒井 (2012: 256) は述べる。トートロジーは、ある時点 T1 において名づけられた対象に、異なるある時点 T2 において再び X による命名を行うことにより、T1 における対象 a と T2 における対象 b のあいだの類似性を主張する文なのである (酒井 2012: 260)。

ここで重要なのは、これらの発話が「イチロー」の同一性、および、「イチロー」という語の意味を共有した上でなされているということはどういうことなのかということである。酒井 (2012) は「意味排除主義」ないし「無意味論」という立場からこれを説明する。この意味排除

主義とは、「言語表現がその使用とは別に文脈独立的な意味をもつという考え方、すなわち、伝統的な（あるいはほとんど誰もが思いつくような素朴な）意味論の考え方を否定する立場である（酒井 2012: 243）」。「語 W は意味をもつ」とはすなわち「語 W はこれまで使用されてきたし、これからも使用されるだろう」ということであり、「語 W1 と語 W2 は異なる意味を持つ」とは「語 W1 と語 W2 は異なる事物に適用されてきたし、これからも異なる事物に適用されるだろう」ということである（ibid.）。

- (7) 野矢 (2011) の表現を用いるならば、言語が成立するためには、「以下同様」という指示が機能する程度には、我々の行為本能が一致していなければならない。「これは猫だ。」「これも猫だ。」…「以下同様。」こう言われて、出会う対象が猫であるかどうか自分で判断できるようにならなければならない。（酒井 2012: 251）

酒井 (2012: 251) が『『猫』という語の意味を理解している』とは、『『猫』を正しいとされるやり方で使える』ということのみであるというのと同様に、(5) (6) は、「イチロー」という語が「以下同様」という形で使用されてきたことをわかっているもの同士が使用しているということを前提としているのである。X という語が「X は X だ」と発話される以前にも用いられていたという事実によって、X はこれまで意味を持っていたと認められる。しかしながら、使用から切り離された本来の意味などは存在しないというのが酒井の主張である。

酒井 (2012: 379) は「本書は、「X は X」が何を語っているかではなく、何を行なっているかを描き出した」と述べる。事実 (2) が示しているように、X は確定した意味を持っていない。酒井 (ibid) が「(これまで使用されていた) X の意味は「X は X だ」という発話によってさらに仕上げられていく」と述べるように、トートロジーの発話は、その X の意味を構築していく行為なのである。

3. プロトタイプと意味の弾性現象

酒井 (2012) は、ある語の意味を固定し、その外に文脈があり使用があるような立場を退け、「意味＝使用」という関係においてのみトートロジーの意味が構築できることを主張した。これと類似した主張を行なっているものに佐藤信夫 (1986a, 1986b) がある。

- (8) たまたま《同義循環》¹や《対義結合》²のような極端な形式の文においては、語の意味の伸縮性があらわになる。A₁ とか A₂ などというぐあいに、意味に番号を振ってみることができそうに見える。しかし、じつを言えば、そういう風変わりな形式のばあいにかぎらず、すべての言語表現においてあらゆる語は、使われる 1 回ごとに意味を伸縮させているのではないか、と考えてみてもいいはずである。（佐藤信夫 1986b: 12）

¹ ここではトートロジーと同義。

² ここでは矛盾文と同義。

この意味の伸縮性を佐藤信夫は「意味の弾性現象」と呼んでいる。しかしながら、これは酒井が批判している立場に含まれてしまうように思われるかもしれない。なぜなら、意味が「伸縮している」と考えるということは、「伸縮できる元々の意味」を想定していることになるからである。この「元々の意味」すなわち、前節で見た意味Cに当たるような意味は意味排除主義の元では受け入れられない。酒井（2012: 344）は「言語学者はしばしば「意味の拡張」や「意味の柔軟性」について語りがたがるが、こうした語り方は実情に即していない。語にははじめから固定した意味などはなく、ただ使用者の動機に基づいて盲目的に使用されるのである」と言う。（2）で示したように、トートロジーの意味は発話時点では未定なのである。

現に、酒井（2012）は坂原（2002）が「ねずみを捕らない猫は猫ではない」（＝（4））と「ねずみを捕らなくても猫は猫だ」（＝（3））の違いについて述べた次の（9）の発言に対し（10）のように述べている。

- （9） ある言語共同体で常識的に認められている基準では、a はネコである。しかし、ネコらしいネコであるための基準が、ネズミを捕ることだとすると、a はネコではない。
（坂原 2002:112）

- （10） 字義どおりには、「ネコらしいネコであるための基準が、ネズミを捕ることだとすると、a はネコらしいネコではない」としか言えないはずである。この引用箇所を整合的に理解するためには、「ネコらしいネコ＝ネコ」という等式を想定するしかない。「X ではない」は実は「真の X ではない」を意味する。
（酒井 2012: 348）

そして、酒井（2012: 348ff.）は「猫のプロトタイプ」とは、「猫」という概念がすでに与えられている場合のみ意味をなす概念であり、酒井は、坂原（2002）が「X」という概念がすでに共有されているという前提に立っていると考えられることから X の意味が未定であることを捉えられていないとしている。（2）の事実で示した通り、トートロジーに現れる語 X は特定の意味を担ってはいないはずであり、「真の X」、つまりは元々共有されている意味の上に成り立つ意味は想定することはできないのである。坂原（2002）などが想定する「プロトタイプ」を用いた「認知意味論的分析」と酒井が称す考え方を棄却することとなる。

一方で「意味の弾性現象」は、佐藤信夫（1986a: 274）の「意味は個々の実現状態において、いつも現に弾性的に伸縮・振動中である」という発言に象徴されるように、使用ごとに意味が異なるということに注目するものである。佐藤信夫（1986b: 12）では、語の意味は一回用いられるごとに変容しているとすら述べている。この「意味の弾性現象」について、森（2016: 88）は「同じ語が同一文の中で、意味を少しずつ拡張しながら用いられており、かつどの意味が元かは決められない。すなわち、もともとその概念が拡がりを持っていて、その拡がりを持つ概念の自己の中で、指示対象が移り変わっていくといったイメージで捉えられる」と解釈している。

佐藤信夫 (1986b: 13) はまた、「語の意味がもし要請どおりに申し分ない自己同一性を維持し続けたとしたら、やや大げさに言えば、すべての論述は途方もない堂々めぐりにおちいつてしまっただろう」と述べる。意味についての佐藤信夫の次の発言は示唆的であるが、結局「拡がりを持つ概念」とは何で、どこから来るのかということは説明しない。

- (11) ことによると意味は《パーソナリティ》のような概念なのかもしれない。意味は、ときどき、まさかあの人が…、あの人に限って…、というようなふるまいを見せるから。意味とは、あいまいな自己同一性への期待のことである、と言ってみたい。

(佐藤信夫 1986a: 284f.)

佐藤信夫は、意味が一回ごとに変容することは認めつつも、同時に、何か一定の「拡がりを持つ概念」のようなものを想定していることも明らかである。使用ごとに異なると考える点では、酒井的であり、意味の存在をあくまで前提としている点では坂原的であると言える。果たして、佐藤信夫が想定する「伸縮する何か」も、「真の X」として棄却されなくてはならないのだろうか。

4. 「プロトタイプ」はどこにあるのか

酒井 (2012) は「以下同様」という形で使用できるということが、意味を知っているということであると主張しているのは先に見た通りである。酒井のトートロジーにおける「以下同様」の内実を詳しく述べるならば、「X は X だ」の X とはある対象に付けられた名前なのではなく、「X としてみる」という態度、ないし X への関心につけられた名前なのだということができる。ある対象を X としてみた、そして、以下同様にある対象を X としてみることを繰り返す。この「関心」そして「X としてみる」ということに関して酒井は主に野矢 (2011: 404) の「相貌」という概念を用いて説明する。「タマは猫である」とは、タマの相貌のもとに捉えられた a に、猫としての相貌を重ね合わせる文である。「タマは猫だ」という文を受け入れる人間は、タマとして扱われてきた対象 a を猫としても扱うことになる (酒井 2012: 339)。」これが、「X としてみる」という態度であり、「X は X だ」という二度の命名は、X を X としての相貌以外で捉えるつもりがないという態度を伝達することとなるのである (酒井 2012: 340)。酒井 (2012) の関心から外れるからこそ、述べられていないのであるだろうが、酒井が引用している野矢の該当箇所には続きがある。

野矢 (2011: 404) は「相貌を知覚するとは、その概念のもとに開ける典型的な物語を知覚することにほかならない」と述べる。例えば鳥の典型的な物語とは「鳥にまつわるきわめて多様な通念の全体 (野矢 2011: 411)」であり、そのカテゴリーの中の代表例というわけではない。「ある概念にまつわる通念を語り出すとき、そこに登場する他のものたちもまた、プロトタイプとなる (ibid.)」のであり、典型的な物語における鳥は、ふつうの森や水辺に生息していたり、ふつうの空を飛んでいた、あるいは、ふつうの人やふつうのカゴの中で飼われていたりする。

このように典型的な物語は互いに関係しあい、世界全体を語り出すのである(野矢 2011: 412)。

プロトタイプについて、坂原 (1998: 95f.) は、プロトタイプのメンバーそのものとする説と、プロトタイプのメンバーから取り出された抽象的な属性の集合とする説の二つを紹介し、カテゴリーの判断にはその両方が必要であると述べている。坂原によると、前者は、日本人にとってはスズメやツバメなどの方が、ペンギンやダチョウなどより鳥らしい鳥であると判断されることを指し、後者は、分類学上の基準である「定義属性」と「空を飛ぶこと」などの鳥と分類されるための必要条件ではないが、鳥らしさを決定する要因となる「特徴づけ属性」を指している。野矢の議論は、坂原が紹介するような「プロトタイプ」に関わる通念を「典型的な物語」とただ呼びかえているだけではなく、カテゴリーを認識するためには中心的なメンバーや属性の集合を知っているだけでは足りないのだということを示している。つまり、鳥を鳥だと認識するには(あるいはツバメをツバメだと認識するには)、個々の属性を知っているだけではなくそれらの属性がどのようにつながり、鳥であることにおいてどのような価値を持つのかをそこに見出されるストーリーを通して知っていなければならない³。

野矢 (2016: 209) は、「ある対象を概念 A のもとに捉えるとき、私はその対象を対象 A の典型的な物語の内に位置づけることになる。この典型的な物語が、その対象の知覚に反映され、相貌をもたらすのである」と述べる。もしこの典型的な物語が、もともと共有されている「意味」として機能していると考えたと、酒井 (2012) の主張と整合しなくなってしまうようにも思われるかもしれない。しかしながら、そうではない。典型的な物語、ないしプロトタイプは経験から得られる可変の存在なのである。例えば、ある人物に関して、その人についてある程度知るとなると「その人についての典型的な物語」が伴うようになるのだと野矢 (2011: 416) は述べる。初めて会う人にその服装を見て、あなたはその人に「君らしくないね」ということはできないし判断もできない。もしそのような発言を受けたら、言われた方は気味が悪いだろう。ただ、その人について知っていくうちに「君らしい」とか「君らしくない」などと判断することができるようになっていく。そのとき初めて「その人という相貌」が成立し、その人に関する個別の「典型的な物語」がそこに開くようになる。これは、別に人物に限ったことではない。目の前のパソコンでも椅子でも机でも、あなたが今、典型的な物語を開くことができるあらゆるものについて、これまで経験的に学んでいき、「ふつうはこういうものだよね」という「当たり前」を体得していったのである。

Taylor (2003: 59) は日々のやり取りの中では、当該の語彙項目が同一の指示対象の範囲に適用され、概念の中心の違いが見過ごされてしまうが、個々人によってプロトタイプとして指し

³ Lakoff (1987 : 116 [池上ほか訳 1993:139]) は「素性の束ということでは、動機づけられた、慣習的な拡張一個々に習得されなければならないが、他方、一般的な連鎖構成の原理によって動機づけられているものを記述することができない。加重素性の束ということでは、プロトタイプ効果の全域を説明しようというところまではどうしてもいけないのである」と述べ、重要度の異なる素性の集まり(加重素性の束)を想定し、その素性がどの程度あるかによって測るプロトタイプの初期の試みは失敗に終わったことを指摘している。坂原 (1998) による説明は、レイコフが批判している初期のプロトタイプ効果の説明にとどまっている。野矢の「典型的な物語」は Lakoff の ICM に近いものである。

示すものが異なるため、個々人の言語体系には正確にはずれがあることを示唆している⁴。さらに「ある言語話者もしくは方言話者間のカテゴリー表象の多様性がどのようなものであるにせよ、多くのカテゴリーのプロトタイプ事例が時間とともに大幅に変化する可能性があることにほとんど疑いの余地はない。(Taylor 2003: 59f. [辻・鍋島ほか 訳 2008: 102])」と述べている。また、Langacker (2016: 431ff.) は、猫の単複 (cat と cats) の認識の非対称性について、複数の猫 (cats) は一匹の猫 (one cat) を基盤として認識されると主張しており、実在する「ある猫」の経験を基盤として複数の猫やタイプとしての猫を認識できるようになるという。経験がなければ、カテゴリーを形成できず、何がそれらしいのかもわからない。プロトタイプとはそもそも、「真の X」という形で普遍的に存在しているものではなく、人々の経験を基盤として常に形作られ続けているのである。

佐藤信夫 (1986a, 1986b) の前提とする「伸縮する概念」もこの節で概観した「典型的物語」と同じように説明されうるものであると考え、酒井 (2012) の主張と整合する。「伸縮する概念」とは経験的に学習され、形を変えていくものだとしても、佐藤信夫の主張と整合しないことはないだろう。佐藤は使用一回ごとに意味が異なるということを認め、その重なりが、伸びたり縮んだりするように見えるということ指摘したのであって、真の X を仮定しなければその指摘ができなかったということでない。佐藤信夫 (1986a: 207) は「意味の分節性＝単位性は、その言語への参加者たちの発言その都度の《新しい意味》のおびただしい重層によって、輪郭がおぼろげである」と述べる。「伸縮する何か」として捉えようとしたのは、むしろ意味の自己同一性への説明を試みたからに他ならない。図 1 の X、Y、Z という意味単位のそれぞれの自己同一性は X、Y、Z の差異の関係としてのみ成立している (佐藤信夫 1986a: 209f.)。使用一回ごとに意味は異なる。それでも X、Y、Z はそれぞれ異なっていると言うならば、互いに膨張したり、重複したりするようにしながらろうじておぼろげな分節性を保っているのであり、佐藤信夫はこれを「意味の弾性的同一性」あるいは「意味の弾性」と呼んだのである (ibid.)。

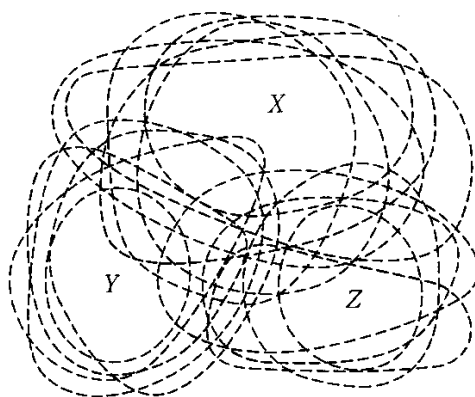


図 1. 意味の弾性状態 (佐藤信夫 1986a: 208) ⁵

⁴ これは酒井 (2012: 276) で引かれているのと同じ箇所である。

⁵ Langacker (2008: 39) の百科事典的意味に関する説明に関する図と類似しているようにも思われる。Langacker は中心性を持つ百科事典的知識のうち発話に使われる知識の領域が様々であることを示し、また、中心となる意

佐藤信夫の主眼は、一回ごとの使用の差異を伸縮と捉えることで掴みきれない概念の同一性への願望を説明しようとすることにあり、その概念自体も使用と同じように一回ごとに異なっていることを示したのである。以上から、酒井は、佐藤信夫が「伸縮する意味」を前提としていても、それを動かない「真の X」として棄却することはできないと考える。

酒井の主張では「以下同様」という形で使えるということがすなわち意味を知っていることだとされる。酒井の議論の焦点は「トートロジーは何を行なっているのか」ということであり、その使用に重点が置かれている。一方、佐藤信夫はトートロジーやそれに関連する表現を通して、動き続けているがために掴みきれない概念を掴みきれないままに記述したのである。

5. 「猫は猫だ」と言えることの不思議

そもそも、なぜ、「X は X だ」と言えるのだろうか。「X は X だ」が「何をしているのか」については酒井（2012）が説明した通りである。「X は X だ」はある対象を X と 2 度命名している。第 2 節で、酒井（2012）は類似性をみてとることがここで言われる命名の本質であると考えていることを述べた。ここで類似性を主張することの動機を、酒井（2012: 261）は、「a と b を同じものとして扱いたい」という思い、そして「a と b は同じ関心を喚起する」という事実であると説明する。類似性を見てとるということは、単に「似ている」ということではなく、「これとこれとに同じ態度で接しようという態度」を表明するということなのである。

意味排除主義が主張する通り、固定した「真の X」などなく、我々は意味を使用するたびに定義し続けている。これまで明らかになったことは、「つまり言語とはそういうものなのだ」という発見であった。では、なぜ我々は、使用ごとに態度を変え、定義し直すなどということが出来るのだろうか。また、どうして、そのことがトートロジーにとって重要なのだろうか。

前節で、「典型的な物語」について概説した。ある対象を典型的な物語に位置づけることが、知覚に反映され相貌をもたらす。だが実際には、ある対象に関心を持つと、相貌は典型的な物語だけではほとんどあらわれてこない。野矢（2011: 406f.）は、「目の前のものにとりたてて関心を抱いていないのであれば、私はただその典型的な物語の世界の内にとどまっているだろう。しかし同時に、典型的な物語を食い破り、そこからはみ出していく実在性も、我々は確かに受け止めているのである」と述べる。我々はある対象を知覚するとき、そこに「典型的な物語」を読み込むのと同時に、典型的な物語を超える詳細や特殊性を持つということも知っている。現実には必ず、典型的ではない要素が含まれる。(12) の野矢の記述からわかるように、我々が典型的な物語を紡いでいく過程は現実の世界に依拠していたとしても、典型的な物語自体は絶対に現実とは乖離しているのである⁶。

味が必ずしも使われる必要がないことを示している。佐藤信夫の図は使われた意味だけを示している点で異なっているといえる。

⁶ Jespersen (1924: 63) は現実の生活のどんな場合であれ、我々に与えられるのは具体物 (concretissima) のみであると述べる。目の前のりんごは単に赤だけではなく、黄色い部分があったり、斑点があったり、そしてこの瞬間、何時何分何秒にこの場所に置かれているといった記述しきれない詳細な特徴を持っている。しかしながら、言語はこの具体性をそのまま保持して伝えることはできず、個別的で具体的な特徴のいずれかを無視しなくてはならない。実際に「りんご」という語は別の時間別の場所の別の個体にも適応できる。厳密に言えば異なるからといって、1 秒ごとに名前をつけ直したのでは、我々は無限に新しい名前を作り続けなくてはならなくな

- (12) 「恋愛」という概念を教えようとしたならば、典型的な物語を教えることになるだろう。大人には面白くもない陳腐な恋愛ドラマを見せたり読ませたりすること。もちろん実際にドラマなどで展開されるのは、多少なりとも典型的でない要素を含んだ物語であるだろう。しかし、それを通して学ばせたいのは「ふつうの恋愛のあり方」である。ふつうの男とふつうの女が、ふつうの遊園地でふつうのデートをし、ふつうの映画を見て、ふつうの食事をする。いっさい個性を剥ぎ取られた徹頭徹尾凡庸な恋愛、おそらくは世の中に存在しない恋愛物語である。(野矢 2011: 403f.)

繰り返すようだが、その対象が持つ詳細をどれだけ、どのように記述するのかは、関心の度合いによる。

- (13) 目の前の犬(「ポチ」としよう)には、ポチに固有の物語がある。そこには典型的な物語に収まらないこともあるだろうし(ポチはよく鼻水を垂らす、ポチは今朝飼い主に怒られた)、典型的な物語に反することもあるかもしれない(ポチは決して「ワン」とは鳴かず、「アーウ、アーウ」と変な声で鳴く)。だが、「犬がいる」という記述に満足する人は、そうしたディテールには関心を持たない。ただ、目の前のものごとを「犬がいる」と記述し、それが開く典型的な犬の物語の内にそれを位置づけて終わらせるのである。(野矢 2016: 214f.)

本稿ではそのような関心の高まりに伴う詳細な認識には「かけがえのなさ」が伴うのだと考える。「かけがえのなさ」について、野矢(2019)は、次の例で説明する。

- (14) 一般に、ある特徴を持っているから好きだというのであれば、その人以外にもその特徴を持った人が現れれば、その別の人で代わりになるわけです。それに対して、ある人をその人の持っている特徴で好きになるのではなく、まさにその人がその人だからというその一点で好きになったとき、それは「かけがえのない」人になります。あなたはその人が好きなのであって、他の誰かでは(その誰かがどのような特徴を持っていようと)だめなのです。それが「かけがえのない」ということです。(野矢 2019: 136)

野矢(2019: 140)は「個別性 = かけがえのなさ - 大事に思う気持ち」という図式で説明をする。本稿では「大事に思う気持ち」というのは、プラスにもマイナスにも存在するものであり、「強い関心」と同質のものであると考える。上記の野矢の説明を「嫌いな人」や「憎い人」に置き換えても「かけがえのない」ことに関しては同じように説明することができる。「その人だから」嫌いなのであって、その人の嫌いな点が直ったとしても簡単に「嫌い」という気持ち

ってしまう(ibid.[日本語は筆者による])。典型的な物語の構築にはすでにその取捨選択が含まれている。何が残って何が捨てられるのかの特徴づけのレベルでも関心の強弱は関わっていると言える。

を拭うことができないことはよくある。同じ特徴をいくら寄せ集めても「かけがえのない」その人やそれとは同じになることはできない。

野矢が強調するように、個別性は重要な点であるが、全てではない。例えば、初対面の「山田さん」を紹介されて、「山田太郎」はこの世にこの人一人であるという個別性を我々は認識できるが、それだけでは山田さんは「かけがえのない」存在にはならない。そこに「強い関心」が伴わないかぎり、「かけがえのなさ」は生まれず、もちろん「関心の高さ」には程度がある。

個別の対象のみならず、この「かけがえのなさ」は一般的なカテゴリーにも伴うものであると考える。例えば、犬を長年飼っている人は犬について詳細に記述することができる。また、飼っていた愛犬が最近死んでしまった人は犬を見ると悲しくなったり、野良犬に噛まれたことはある人は恐怖を抱いたりする。たまたま犬を散歩している人に出くわし、「可愛いですね。秋田犬ですか」「耳が大きいですね」などと話しかける人がいたとすれば、その人にとって「その犬」がかけがえのないのではなく、「犬」というカテゴリーに特別な感情を抱いているからこそ、詳細な認識ができるのである。彼らの犬を見る目は犬か猫かの区別さえつけばいい人のものとは明らかに異なっている⁷。

また、個別の対象やカテゴリーに人間が抱くある種の関心のあり方であるとも言えるが、単に目の前の対象に関心を持って接するということとも異なる⁸。例えば、多くの人にとって電球は切れたら単に買い換えるだけで、切れてしまったその電球を想い、涙することはない。一方で、新しい電球を買いに行くときに電球に関心を持ち、売り場に並ぶそれを電球としてカテゴリー化し、電球の典型的な物語を開く。しかし、ここでの電球はやはり単なる電球であり、電球についてその場である種の関心を持って接していた（どのメーカーにするか迷うなど）としても、「彼にとって電球はかけがえのないものだった」とは言えない。かけがえのなさは経験的に紡がれるものであるが、単に接する回数が多かったり、話題に上がったりするだけでは習得できない。

「かけがえのなさ」とは、あるものとあるものを区別するときに用いられる知識の一部であり、特定の性質や具体的な個別性に還元できない領域である。現実の事物は全てある種の個別性があり、典型的な物語を超える細部を持つが、それに注目するかしないかの判断はカテゴリー化する主体に委ねられる。「かけがえのなさ」はある種の差異を表面化する動機として機能し、独立した知識として存在している。

そして、重要なのはこの「かけがえのなさ」が人によって程度が異なるということ自体を我々がたとえ無自覚的にでも、知識として持っているということである。「犬も狼も同じでしょう」と言う人とその発言に「全然違うよ」と応答する人とでは、後者の人の方が、犬ないし狼に対

⁷ 古田 (2018: 132) において、言葉を理解していると言えるためには、その言葉の使い方を知っているだけではなく、その言葉を「体験できる」つまり、多面的立体としての輪郭をつかめることも重要であると述べられていることは興味深い。古田 (2018) が提示する「言葉の魂」はこの「かけがえのなさ」と類似するものである可能性がある。我々がびったりはまる表現を探すのは、言葉の立体性を理解しているからであり、かけがえのなさを見出しているからとも言えるかもしれない。

⁸ 野矢 (2011) は固有名とは対象につけられた名前ではなく関心につけられた名前であると述べ、酒井 (2012) もこれについて引用している。本稿はその「関心」は一樣なものではなく固有名に限ったものではないと主張する。また、知識の領域にどういった存在として在るのかを書き出すことを試みているつもりである。

して詳細な認識をしていることは明らかであり、関心の度合いが高いことが理解できる。また、かわいがって飼っている猫のタマであれば、夏毛に生え変わったことや元気がないことなどに飼い主は気づくことができる。「かけがえのなさ」を見出した場合、そのような詳細な違いによく気づくということができるのである。また逆に、全く異なってしまったとしても、同じだとみなすことができる。たとえば、フィクションで生まれ変わって犬になった父親をその息子が「犬が父親だ」と気づく場面などはよくある。その場合、いくらフィクションでも、たまたま通りがかった人や特に親しくもなかった人が犬を見て「もしかして生まれ変わったあの父親ですか」と気づくという設定は少ない、またはより現実的ではないと感じるだろう。我々は「人によって」何にかけがえのなさを見出すのか異なることを知っているし、どのような人なら何にかけがえのなさを見出すのかをある程度予測することができるのである。かけがえのなさを見出しさえすれば、対象が人から犬へ変わってしまってもそこに同一の何かを見出すことができる。これは酒井の用語では類似性を見てとるということであるが、本稿が焦点を当てたいのは、類似性を見てとれるか否かが人によって異なり、かつ、我々はそれを互いに予想しあっているという事実であり、そのことを知識として持っているということである。そしてそれらが、我々がトートロジーにおいて二度命名することができ、そして二度命名することを許す聞き手になることができるということを支えている。

我々は多くの場合、世界の対象について、その何かに対して異なる関心、かけがえのなさを抱いている。このかけがえのなさは確かに対象の類似性によって習得されるが、一度習得されると、その対象とは独立に捉えられる。同じかけがえのなさを見いだせば、どんなに根拠がなくとも、犬を父親と見ることができるように、異なる対象を同様に X としてみることができる。いかなる言語表現でも、かけがえのなさの度合いはその伝達される意味に関係している。しかしながらそれは多くの表現ではあまり顕在化しない。トートロジーは、酒井が述べるように話し手の態度を示しており、人それぞれが何かに「かけがえなさ」を見出すことの自由を表面化する表現なのである。「X は X だ」における X の意味は未定であるにしても、X に関する我々の知識は無ではないし、個々人によってそれが様々な仕方で異なり、お互いに差異を了解しているという事実は否定できない。

6. 不毛なトートロジー

酒井（2012: 295ff.）は不毛なトートロジーの例として以下を提示する。

(15) #ダヴィンチの絵のモナリザはモナリザではない。 (酒井 2012: 295)

(16) #ダヴィンチの絵でも、モナリザはモナリザだ。 (酒井 2012: 295)

酒井は、(15) について、時点 T1 において X と名づけられた対象と、時点 T2 において X と名づけられた対象が全く同じで、差異が生じる余地がないようなものであれば、単に二度名前をつけただけであるためこの発話は不毛となり、(16) でも時点によって対象に差異がないので

同様に不毛な発話になると述べる。

本稿の立場では、「ダヴィンチの絵のモナリザ」でも対象が異なっている可能性を完全に否定することはできないし、この二つの例は、「かけがえのなさ」の欠如もしくは不足によって不毛な発話に聞こえるのであると説明すべきだと考える。「モナリザ」についてほとんど関心を持たない人であれば、「モナリザ」の物語に「ダヴィンチの絵である」くらいの中身しか伴わない。そのような人であれば、上記の例は初めも後も「ダヴィンチの絵のモナリザ⁹」であること以外想定できず、全体として何が言いたいのかよくわからない。そこに関心の差異を読み取ることができないのである。そしてこの例を酒井が言うように不毛であると納得できる人はモナリザをたまたまかけがえのない存在として認識していなかっただけなのである¹⁰。実際、ダヴィンチが書いたモナリザにも複数のヴァージョンがあると言われており、複写や弟子の作品でもタイトルが「モナリザ」であるものはありそれらを総合してモナリザと呼ぶこともできる。また例えば、ダヴィンチの弟子のサライが書いた裸身の「モナリザ」こそが「モナリザ」なのだと訴えたい人にとっては(15)は不毛などではないし、その人が、ダヴィンチの絵の方に譲歩するような発話であれば、(16)も不毛ではないだろう。対象に差異が生じ得ないと判断できるのは、対象にこだわりがなくて差異を気にしない人であるだけなのである。

酒井(2012: 295ff.)がさらに先ほどの例との対比で、ダヴィンチのモナリザとダヴィンチのモナリザには差異が生じることはないが、太郎のモナリザとダヴィンチの描いたモナリザでは差異が生じると述べるためにあげた例が下の二つである。

(17) 太郎が制作したレプリカのモナリザはモナリザではない。(酒井 2012: 296)

(18) 太郎が制作したレプリカでも、モナリザはモナリザだ。(酒井 2012: 296)

これらは我々のようなモナリザへのかけがえのなさの限りなく少ない人物が概念化したとしても、理解できる程度の差があったのだと言い換えることができる。つまり、「モナリザ＝ダヴィンチの絵」くらいの物語が開ければ、太郎の制作したレプリカへの態度と、ダヴィンチのモナリザとの態度が異なることは理解することができる。この例では、指し示す物理的対象が「太郎のレプリカ」と「モナリザ」で明らかに異なっているため、やはり対象の差異によると思われるのかもしれない。しかしそうではない。モナリザへのかけがえのなさの度合いが筆者のように低くても、例えば以下の例は理解できる。これは時点 T1 と時点 T2 では対象は「モナリザ＝ダヴィンチのモナリザ」であるという了解は変わらない。これは、筆者を含め多くの人が「モナリザは美術作品でものもであり、100 年経ったら変質することがありうる」ということを知っ

⁹ 本稿の立場では正確にいうならば「モナリザ」と「ダヴィンチの絵のモナリザ」は異なる典型的な物語を開くためそもそも同一ではあり得ない。ここでは「モナリザ」に関して「ダヴィンチの絵」ということしかその対象を位置付けることができないという意味であると理解されたい。

¹⁰ 本稿を読む人のほとんどは「モナリザ」についてさほど関心がなく、ここでの議論が理解できないかもしれない。しかしモナリザにまつわる謎について書かれた本はあらゆる言語で膨大に存在するし、Wikipedia の記述を見ただけでもある特定の人たちにとっては「モナリザとは何か」がとても大きな問題であることが見受けられる。Wikipedia を編集した人物からすれば「モナ・リザ」とすべきだと怒られそうではあるが、ここでは酒井(2012)の表記に従って「モナリザ」としている。(cf. <https://ja.wikipedia.org/wiki/モナ・リザ>)

ているからであって、そこまで関心がなくとも理解できるからなのである。

(19) ダヴィンチのモナリザは 100 年後もモナリザだ。

(20) ダヴィンチのモナリザでも 100 年後はモナリザじゃない。

あるカテゴリーに対して、かけがえのなさを見いだす人なら、その差異について敏感になり、関心の差に名前をつけることが容易になる。命名権があるということをより一般化していうならば、その詳細を認識できるほどの関心を持っているかいないか、つまり対象やカテゴリーに「かけがえのなさ」を見いだせるかどうかは個々人の自由だということを知っているからである。このように主張することは、命名とは関心への名づけなのだと述べた酒井（2012）の主張とも整合している。酒井は第2節で紹介したように名前は関心につけられ、類似性を見てとる態度を示せば同じ名前をつけられることを主張している。これは指示対象の物理的な差異とは別のものである。類似性とは我々の判断に基づいており、対象の物理的な差異に基づいていする必要はないのである。酒井は「不毛なトートロジー」への説明も指示対象の差異などは持ち込まずに説明するべきであったと思われる。

7. おわりに

酒井（2015）の「無意味であるはずの文が実際の言語使用において意味を持つのはなぜか」という問いへ本稿は次のようにこたえたい。トートロジーが意味を持つことができるのは、意味が経験から構築されるものであり、変わり続けることができ、世界への関心が人によって異なることを互いに了解しているからなのである。

世界の実在を認めるのならば、我々が、意味を学ぶのも、意味づけをするのも、この現実の世界から経験的に得たものでしかあり得ない。そして、意味づけされる対象は、世界に時間が存在している限りとめどなく変化し続けている。この変わりゆく世界に存在するからこそ、認識も概念も意味も変わり続けている。言葉はそれをそれぞれの関心に合った形で切り取っていくことしかできない。本稿の議論に対して、丸山（1981）の下記の発言は示唆的である。

(21) コトバは事物を名づけるのである。すなわち、既に切り取られカテゴリー化された非連続体にラベルを貼るといった意味の命名ではなく、命名することによって連続体を非連続体にし、実存を転調し、事物の中に捕えられていた意味を解放するという意味での、真の命名作用を持つのが本質的言語なのである。（丸山 1981: 206）

参考文献

酒井智宏（2012）『トートロジーの意味を構築する―「意味」のない日常言語の意味論―』東京：くろしお出版。

酒井智宏（2015）「トートロジー」 斎藤純男・田口善久・西村義樹（編）『明解言語学辞典』東

- 京: 朝倉書店.
- 坂原茂 (1998) 「認知的アプローチ」 郡司隆男, 阿部泰明他『岩波講座 言語の科学 4 意味』83-124. 東京: 岩波書店.
- 坂原茂 (2002) 「トートロジーとカテゴリ化のダイナミズム」 大堀壽夫 (編)『認知言語学 II: カテゴリ化』 東京: 東京大学出版会.
- 佐藤信夫 (1986a)『意味の弾性』 東京: 岩波書店.
- 佐藤信夫 (1986b)『レトリック・記号 etc.』 東京: 創知社.
- 野矢茂樹 (2011)『語りえぬものを語る』 東京: 講談社.
- 野矢茂樹 (2016)『心という難問 空間・身体・意味』 東京: 講談社.
- 野矢茂樹 (2019)『そっとページをめくる——読むことと考えること』 東京: 岩波書店.
- 古田徹也 (2018)『言葉の魂の哲学』 東京: 講談社.
- 丸山圭三郎 (1981)『ソシュールの思想』 東京: 岩波書店.
- 森雄一 (2016)「自己比喻をめぐる」『成蹊大学文学部紀要』 51: 87-97.
- Jespersen, Otto. (1924) *Philosophy of Grammar*. London: George Allen & Unflin.
- Lakoff, George. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Univ. of Chicago Press. [池上・河上ほか訳 (1993)『認知意味論—言語から見た人間の心—』 東京: 紀伊國屋書店]
- Langacker, Ronald.W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald. W. (2016) Baseline and Elaboration. *Cognitive Linguistics* 27.405-439.
- Taylor, John R. (2003) *Linguistic Categorization*. New York: Oxford University Press. サードエディション [辻・鍋島ほか 訳 (2008)『認知言語学のための 14 章』 東京: 紀伊國屋書店.]

What Makes Tautology Meaningful?

Rana Sato

ranasato877@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

Keywords: tautology, meaninglessness, categorization

Abstract

Sakai (2012) argues that tautology is an act of “naming twice” by means of the same word, an act based on the freedom to name the designated entity by invoking a perceived similarity. On this view, the meaning of a linguistic sign is renewed every time the sign is used, rather than being something invariable that is rigidly associated with it. Positing that what makes this constant renewal possible is the utterer’s intense interest in the entity referred to, this paper shows that tautology serves to express the freedom to identify something unique about the entity, something that inspires the intense interest. This uniqueness is precisely what triggers the perception of similarity as the driving force behind “naming twice.” We are cognizant, at least to some extent, of the uniqueness that others sense in objects and categories, thereby establishing and maintaining a speech community where members allow one another the freedom to “name twice.”

(さとう・らな 東京大学大学院)